

《論 説》

アテナイにおけるト占

ロバート・パーカー 栗原麻子 訳

今日は、アテナイにおけるト占についてお話ししたいと思います。まずは、ト占についての少し一般的なお話からはじめることにしましょう。ト占、すなわち神託や予言者の声を聞くことは、人類のあいだに広範にみられる慣習です。おそらく、何らかのかたちでト占が存在しないような人間社会はないでしょう。私は、日本におけるト占の形態についてうかがうのを楽しみにしております。

1937 年、人類学者エドワード・エヴァンス＝プリチャードは、ナイル溪谷のアザンデ人のあいだでおこなわれていたト占についての研究を公刊しました（文末の参考文献を参照のこと）。私見では、これは 20 世紀の最も重要な出版物のひとつです。エヴァンス＝プリチャードはそこで、フランスの思想家リュシアン・ルヴィ＝ブリュールによる、未開なるものの心性は近代人のそれとは異なるはたらきをしていたという見解—すなわちルヴィ＝ブリュールの未開心性論—にたいして挑戦を突きつけました。エヴァンス＝プリチャードは、いっけん奇妙で非合理的な観念や慣習も、その文脈のなかにおいてみれば完全に意味をなすと論じたのです。そのような観念を抱く人々が何を知っているのか、そして、そのような奇妙な慣習が、どのような方法でどのような文脈のもとに適用されるのかを、考慮に入れる必要があるのです。彼が強調したのは、ひとつには、ト占の習慣をもつ人々が愚かしいわけではないということです。彼らは、すべてを信じ受け入れるわけではなく、個々の神事従事者のことを平気で悪くいいます。だからといって、彼らが、ト占や予兆を完全に否定しているわけではありません。それはどちらかといえば、われわれが医者にたいして採る態度に似ています。われわれはみな、医者には、ましなものもそうでないものもいると考えていますが、みな、医学のことは信じています。エヴァンス＝プリチャードは、フィールドワークのあいだ、いつ何をするかを決めるために、地域の神託を訪ねる習慣としていました。彼は、人生をアレンジする方法として、神託がほかの方法に勝るとも劣らないことを発見したのです。

典型的な神託：ドドナ

ギリシアの神託のなかで有名なのは、なんといってもデルフォイの神託です。けれどもギリシアの神託が実践的な日々の営みであったということを感じ得るためには、北西ギリシア

のドドナでおこなわれたゼウスの神託からはじめるのがよいでしょう。なぜならば、ドドナには神託をうかがう人々が鉛板に質問を記す習慣があったため、そのような^{タブレット}板が数多く発掘されているからです。エリック・ロテの手で2007年に167枚が公刊されると、エスター・エイディナウがこれを用いて、たいへん秀でた研究書を出版しています（参考文献）。2013年には、さらに数千枚が公刊されました。わたくしも、この新しい証拠を利用して見たことがあります（参考文献）。われわれの手もとには、今や数千にのぼる問いかけ文があります。ところが回答は2・3個だけです。回答が数個しか残されていないということに、フラストレーションと困惑を覚えずにはおれませんが、問いかけ文から知ることができることもまた膨大です。いくつかご紹介しましょう。

カリクラテスは神に尋ねる。彼と一緒に暮らす妻から、私の子を持つか持たないか、それは、どの神に祈りを捧げることによってであるか。（*Lhôte* 48）

子宝についての問いかけはたくさんあり、これもそのひとつです。一人称（わたくし）と三人称（彼）のあいだの混乱は、この種のテキストにはよく見られることです。

私は来年、土地を売ってコリントスに移住すべきか……そして私はその地で外国暮らしをしても安心か（*DVC* 3220）。

井戸のこと。掘れば、12尋以内で、夏にも豊富な水を手に入れることができるかどうか（*DVC* 1441、および159）。

クレウタスがゼウス神とディオナ女神に尋ねる。羊を飼うことは彼にとって利益となり恩恵となるかどうか（*Lhôte* 80）。

これらはすべて生計にかかわる質問です。井戸の掘削についての問いかけは、小さな事業についてのたいへん的確なものです。

現在と過去についての問いかけすらあります。

リュサニアスはゼウス・ナイオス神とディオナ女神に尋ねる。アニュッラが身ごもっている子どもは彼の子であるかどうか（*Lhôte* 49）。

ティモはアリストブラに毒を盛ったのか（*DVC* 1028 = *Lhôte* 125）。

トピオンは銀を盗んだのか (*Lhôte* 119)。

数はずっと少なくなりますが、都市による問いかけもあります。わたくしが大好きなのはこれです。

ドドナ人が、ゼウス神とディオナ女神に尋ねる。神が嵐を起こしているのは何人かなんびとの不浄ゆえか否か (*Lhôte* 14)。

ドドナの事例からは、決定的に重要な論点が導き出されます。個人にとってト占は、なによりもまず行動の指針であったということです。あなたは、選択しなければいけないことがあるときに神にうかがいを立てるのです。結婚すべきか。コリントスに行くべきか。羊を飼うべきか。問いかける人が、悩み事や抱えている問題を、たったひとつの問いかけのなかに結びつけている面白い問いかけがあります。

神よ。幸運よ。エピリュトスはゼウス・ナイオス神とディオナ女神に尋ねる。彼は何をすれば成功し、そしてそれは、どの神に犠牲を捧げることによってであるか。わたくしはこれまで修行してきた通商に携わるべきか、それとも転職すべきか。彼が試みれば私はそれを成し遂げるか。ファイノメナを妻として娶るべきか、ほかの女か、そしてそもそも私は（今）妻を娶るべきか待つべきか (*DVC* 2367)。

このようにト占は遠い未来を占うための試みではなく、もっと現実的な何かなのです。個人として、あなたは困難な決断を抱えているときに神託を聞くのです。

都市による問い

都市もまた、ときおり、困難な決断を迫られて問いかけをおこなうことがありました。これはドドナの事例ですが、名称不詳のある共同体が、モロツシア人のより広域的な連邦と緊密な関係を結んでも安全かどうか悩んでいます。EU に加盟しようとする近代国家が神託をうかがうようなものです。

[・・・] のコイノン（共同体）がゼウス・ナイオス神とディオナ女神に尋ねる。モロツシア人との共通市民権に加入しても安全か否か (*Lhôte* 9)。

しかし国家による神託うかがいには、もうひとつ重要な機能がありました。神託は宗教的な変革を権威づける手段だったのです。ほかに手だてはありませんでした。ギリシアに

は、宗教的な事柄について規則を与えるような宗教の専門家も靈感のある預言者もおりました。宗教上の改革が神々に喜ばれているのかどうか、何としても知りたいとなれば、それを知る唯一の方法は、神々に直接訊ねることだったのです。だからプラトンの『国家』に登場するソクラテスは、彼の理想国家について、「神殿の設立、神々や神霊や英雄のためのその他の形態の祭祀、死者の墓と、死者を慰めるために必要な奉仕」にかかわるすべての問題について、デルフォイのアポロン神にうかがいをたてるように規定しています。なぜなら「この神は、そのような事柄についての父祖の代からの解釈者であり、大地の中心のオンファロス（へそ石）に座って、彼らにたいして、それを解釈する」（427b-c）からです。

まさにこの種の問題についての多くの問いかけが残されています。国家が神託をうかがうもうひとつの局面は、危機、とりわけ疫病です。トゥキュディデスは、アテナイが大疫病にみまわれたときに、神託が役に立たなかったと語っています。

神殿における嘆願、神託うかがい、その他は何の役にも立たず、とうとう彼らは諦めて災厄に屈してしまった（トゥキュディデス『歴史』第2巻第47節）。

しかし、古代とはいってもずっと遅く後2世紀に入ると、小アジアの多くの都市が、クロスの神託所で、疫病についてアポロンの神託と助言を受け、それが役に立ったと考えていたことがわかります。都市がアポロンの返答を刻んで公開したために、それがわかるのです¹⁾。

国家による神託の用法の最後は、保険のような利用法です。

コリュキュラ人とオリコス人はゼウス・ナイオス神とディオナ女神に尋ねる。どの神や英雄に犠牲を捧げ祈れば、最善かつ最も安全に都市に居住し、よい収穫・豊富な収穫を享受できようか。（Lhôte 2）。

みたところコリュキュラ人がなにか特定の危機に直面しているわけではありません。彼らはうまくやっている。だがそれが続くという確証が欲しい。だから正しい神々の加護を確実に受けたい。機嫌をとるべき正しい神々について助言を得ることは、都市にとっても個人にとっても、神託をうかがう主要目的の一つでした。

アテナイと神託

ここで、いよいよアテナイの話に入ります。周知のように、ある意味では「ギリシア宗

教」について語ることは可能です。全ギリシアに共通の神々や習慣や儀礼が存在しています。しかしひとつひとつの都市のあいだには多くの差異が存在していました。それゆえもう一つの観点、すなわち地域性にも目を向け続けることが重要です。まさしくわたくしの本日の主題であるト占には、面白い地域性がみられます。アテナイには地域の神託所がありませんでした。アテナイはこの点で隣人のボイオティアとかなり異なっていました。ボイオティアには3、4か所の神託所があったのです。そのうち、アテナイにもっとも近くて主要な神託は、北西の沿岸部にあるオロポスのアンフィラオス神の神託でした。この神託所は、遅くとも前430年までには、アテナイの支配に組み込まれたり外れたりしていました。ところが神託所は、すでにそのころ、一般的な目的のための神託ではなく医学的な案件に特化していました。それゆえ、アテナイ人たちは、神託の助言を受けるために外国へ旅をするか、ほかのト占の方法をとらなくてはなりませんでした。国外の神託のうち、アテナイ人がもっとも頻繁にうかがいをたてたのは、もちろんデルフォイのアポロン神の神託でした。デルフォイのアポロン神であるアポロン・ピュティオスはアッティカ地方で甚大な権威を誇っていました。アポロン・ピュティオスは、神域や祭祀をいくつか捧げられていましたし、主要な祭祀であったタルゲリア祭も彼のものでした。ピュタイデス〔デルフォイへの巡礼〕の立派な行列が、アテナイから定期的にデルフォイに遣わされていました。アテナイ人は、公的にも私的にも、デルフォイにうかがいをたてました。僭主ペイシストラトスとその息子たちの支配下には、神託うかがいの事例が欠如していることから、僭主一家がデルフォイから故意に背を向けたのだと考える研究者もいます。しかし、クレステネスが民主制を確立すると、新設の10部族の名祖とすべき英雄を選ぶために、デルフォイが問いかけを受けたのでした。

〔クレステネスは〕事前に選んだ100人の「始祖」のなかから、各部族に、ピュティア（神託を告げる巫女 訳者注）が推薦した10人の名祖の英雄を与えた（アリストテレス『アテナイ人の国制』第21章第6節）。

ただ、この問いかけにどこまでのことが含まれていたのかがはっきりしません。ピュティアが選んだのか、だとすればどうやって選んだのか。あるいはピュティアは、アテナイ人の選択を支持しただけなのか。いずれにせよピュティアが何らかの方法でかかわっていたことは確実です。デルフォイへの神託うかがいのなかで、もっとも有名なのは、前481年のペルシア侵攻の際の神託でしょう。もちろん皆さんもその話はご存知でしょう（ヘロドトス『歴史』第7巻第140－144節）。アテナイ人がデルフォイに助言を求める使者を送ると、アポロンは助言を与え、都市を捨てて地の果てまで逃げるように告げた。使者はこの絶望的な助言を受け入れることを拒絶して神域に留まり、「彼らの祖国についてなにかもっとましなことを予言してください」と頼んだ。するとアポロンは、木の砦を信用せよという有名な助言をもって応えた。使節が本国に戻ると、木の砦とは何を意味するのか、アクロポリスの壁なのか、

それともテミストクレスが論じたように船のことなのかをめぐって議論が巻き起こった、というものです。不幸なことに、この有名な話には多くの問題があります。ヘロドトスが挙げる回答は韻文ですが、回答が韻文のかたちで与えられるのかどうかを疑う研究者もいます。もっとひどいのは第2番目の回答で、ピュティア（巫女）が、サラミス島について語っているという事実です。「聖なるサラミスよ、あなたは女たちの子供らを破滅させるでしょう。[大地の女神] デメテルが耕されるときであれ、収穫されるときであれ」。決定的な戦いは、もちろん、サラミス島の近くでおこなわれました。その詳細が、かえって、ヘロドトスの伝える予言が事後の創作であるという疑いを抱かせます。この点について確実なことを述べるのは困難ですが、いずれにせよ、この危機に際して、デルフォイにうかがいが立てられたことだけは、受け入れてよいでしょう。ヘロドトスの作品が書かれたのは、この出来事から55年後のことです。しかも彼は、その前から口頭で作品を発表していたでしょう。前481年に何がおこったか、記憶している生き証人がいたはずで、ありもしないデルフォイへの神託うかがいの話を聴衆が受け入れたとは考えられません。

別の視点から、デルフォイが、悪い助言のせいで、ペルシア戦争後にギリシア世界で権威を失ったとする研究もあります。デルフォイが、いくつかの国家にたいして、ペルシアによる侵攻を待たずに降伏せよと助言したことが、敵を支持するペルシア最良の罪に当たったというのです。しかしこれは単純に間違いです。アポロン神がペルシアに肩入れしたと述べているのは現代の研究者であって、ギリシア人自身は、そんなことを言ったことも考えたこともなかったのです。有名な碑文（Meiggs-Lewis, *Greek Historical Inscriptions* 27）がその証拠です。これは、いわゆる蛇柱と呼ばれる、侵略者にたいして戦った国家のリストですが、ペルシアが撃退されるや否や、デルフォイのアポロン神に奉納されています。もしギリシア人がアポロンに裏切られたと感じていたならば、奉納はなかったでしょう。実際、アポロンの権威は、依然として前5世紀にも高いままでした。

さてこの点に関して、ある重要で議論の尽きない問題があり、イギリス人の同僚であるヒュー・ボーデンの著書（参考文献）と私のあいだで見解が割れています。1985年、私は論稿「ギリシア国家とギリシアの神託（Greek States and Greek Oracles）」（2000年に再録）を著しました。アルカイック期のギリシアでは、出兵や植民といった、われわれが政治的とみなす問題について神託をうかがうことは、国家にとってありふれたことでありました。現にアテネ以外の国家は、遅くまでその状態でした。トゥキュディデスはスパルタ人によるその手の神託うかがいを、2つ取り上げています。ひとつはアテナイにたいする（ペロポネソス戦争の）宣戦布告、もうひとつは植民についてです。

スパルタ人は、条約が破られアテナイ人が悪事をはたらいているとして、デルフォイに使者を送り、戦いになれば利となるか否かを尋ねさせた。伝えられるところでは、神は、「全力で戦えば優勢であろうし、召喚されようとも呼ばれずともスパル

タ人を助けるだろう」と約束した（トゥキュディデス『歴史』第1巻第118節3）。（なお第3巻第92節5には、スパルタ人が、トラキア地方のヘラクレイアに植民することが望ましいと決定して、これをアポロン神に諮ると、アポロン神は、やれといった、とある。）

わたくしはこの論文で、「木の砦」の神託を導きだした前481年の神託うかがいが、アテナイが政治的な問題についてデルフォイにうかがいを立てたことが明らかである最後の機会であったと論じました。前479年以降、アテナイ人は軍事・政治上の問題について神託をうかがうのをやめたと示唆したのです。私は、彼らが神託うかがいそのものをやめたといっているわけではありません。彼らが宗教的な問題について神託を聞き続けたことは確かです。新しい神託、たとえばドドナのゼウス神や、北アフリカのシヴァのゼウス・アンモン神が登場してきます。わたくしはまた、アテナイ人が政治についてうかがいを立てることを決議で禁じたといっているのでもありません。そのようなことは考えられません。それは明確な政策上の決定ではなかったのです。わたくしが論じたのは、民主制下のアテナイ人が、より確信をもって自分たちで決断を下すことようになり、政治家たちが、間違った結果をもたらすかもしれない神託をうかがう危険を冒すよりも、民衆を説得することを選ぶようになったということです。これにたいしてヒュー・ボードンは、変化はみられないと反論しています。政治的な問題についてうかがいをたてたことをはっきりと示す事例がないのは、資料状況があまりよくないために過ぎないというわけです。たしかに資料が問題です。前5世紀には、政治的な問題について神託をうかがったり、そのように資料に述べられていたりといった事例がいくつかみられます。ですが、それらの資料は信頼に足るものなのでしょうか。典型的なのが、前415年のシケリア遠征の事例です。[アテナイの将軍]アルキビアデスが、ゼウス・アンモン神に、「シュラクサイ人をすべて捕虜にすることになろう」と告げられたものの（プルタルコス『ニキアス伝』第13章第2節、第14章第7節も参照のこと）、結局、彼はすべてのシュラクサイ人の名を記したリストを手に入れただけであったと伝えられています。これは、神託に惑わされる典型的なストーリーであり、神託をうかがった人間の思いもしなかった方法で神託が成就された事例です。シケリア遠征前の神託についての話はほかにもありますが、すべてこの類です。揃いもそろって、できすぎた話なのです。トゥキュディデスはこれらについて沈黙しています。わたくしは『アテナイの多神教と社会』（*Polytheism and Society at Athens*, 109–111 ページ）で、再びこの問題を取りあげました。ここですべてを詳細に論ずることはできませんが、ただ、例外的な事例の可能性が2つ3つあることだけは認めておきたいと思います。トゥキュディデスに面白い事例があります。前422年、アテナイ人はデロス島からデロス人を放逐しましたが、翌年、前421年、ニキアスの平和下に彼らを復帰させています。トゥキュディデスは、その理由が「戦闘におけるデロス人の不幸を記憶しており、デルフォイの神がそう命じた」（第5巻第32節1）ことだったと述べてい

ます。これは確かに、神託に従った行動の一例です。ところがわたくしたちは、なぜ「デルフォイの神がそう命じた」のかを知らされていません。アテナイ人は宗教的な事柄について尋ねたのに、それにたいして政治的な答えが返ってきた可能性もじゅうぶん高いのです。前 399 年のある奇妙なできごとがここに関係してきます。エレウシスの秘儀に入信しようとする候補者が、定め通りに海で浄めをおこなっていたところ、サメに襲われ半身を食べられてしまったのです。ある敬虔な市民がこれを何かの予兆とみて、ピュティアにうかがいをたてるべきだと提案しました。ところがデモステネスは「ピュティアはフィリッポス最良である」という理由で、この提案に反対しました。デモステネスは、ピュティアが、アテナイにとって災厄となるような人心を乱す予言をするのではないかと恐れたのです。この事例が示すことは 2 つあります。一つには、仮に、どうしてもよいことについて神託をうかがったとしても、問いかけとは違う政治的な答えを得る可能性があったということ、2 つには、経験豊富な政治家が、それを理由として神託にたいして神経質になりえたということです。

ボーデン氏とわたくしのあいだの論争に、最終的な決着がつけることはできません。もし関心をお持ちでしたら、資料に当たってご自身で判断してください。わたくしが完全に明らかなだと考えているのは、アテナイ人が内政について神託を聞くことは皆無だったということです。それは、市民によって構成員される民会の仕事にはほかならなかったのです。

宗教的なことならについての問いかけ

わたくしはすでに、政治にかんする事例はともかくとして、神託が、祭祀について助言を与える重要な役割を保っていたと述べました。前 430 年代か前 420 年代のどこかの時点で、アテナイ人は、同盟国にたいしてエレウシス「アテナイの神域 訳者注」へ初穂を送ることを命じ、ほかの国家にたいしてもこれを奨励しました。それは「父祖伝来の習慣とデルフォイの予言によって」(Meiggs-Lewis 第 71 番) なされたのです。前 400 年のランブトライの碑文にも、とても小さな事例が残されています。それは、ハリュコスと呼ばれる泉にかんするもので、泉の水を飲むために支払が必要だというものです。この場合あきらかにデルフォイがうかがいを受け、支払の必要性を認証しているのです。

ピュトの予言「デルフォイの神託のこと 訳者」にもとづき、下記のごとくニュンフたちに支払いをして、犠牲を捧げること。ハリュコスの泉から水を飲むものは毎年、儀礼のために 1 オボロスを支払うべし。1 オボロスを支払わないものは何人なりともハリュコスの泉から飲むこと能わず ...

(F. Sokolowski, *Lois sacrées des cites grecques*, 1969, no. 178.)

ドドナもまた図の一画を占めていました。前 5 世紀末、トラキアの女神ベンディスがアテ

ナイに導入される際に、この問題についてドドナの意見を求められました。少々複雑ですが、前5世紀ごろの、とても断片的な決議が残っています (IGI³ 136)。関連する箇所だけを挙げておきましょう。

できるだけ麗々しく、夜を徹する儀礼を遂行すること

…月の11日に…

…神官？の妻が…すべきかどうか…

…すべてのアテナイ人は…送ると／随行すると…

…できるかぎり速やかに。そして何であれ（神が）答えたとおりに…

…公におこなわれた犠牲を受けるべし…

…10の犠牲獣から…。ほかの皮は…

…将来、ヒエロポイオイ（神官）が、これらの事柄について籤で任命されるべし…

…それぞれの機会にベンディス女神のために50 [ドラクマ] で…

もっとも重要な部分は太字にしています。これらは神託がうかがわれたこと、それがベンディスの祭祀にかかわっていたこと、祭祀における女性の役割が問題となっていたとことを示しています。時代をくだって、前3世紀ごろの決議 (IGI² 1283) は、次のように始まります。

アテナイ人はすべての外国人のなかで、トラキア人だけに、ドドナの返答に従い土地を所有し神殿を設立する権利、評議会場のかまどから行列を出発させる権利を授与し…

2つの碑文が言及しているのは、同じドドナの神託なのでしょうか。確かなところはわかりませんが、それはとてもありそうなことです。そしてまたアテナイが前4世紀にドドナにうかがいを立てていたという文献上の証拠もあります。彼らはリヴィアのシワにあったゼウス・アンモン神の神託にもうかがいを立てはじめました (R. Parker, *Athenian Religion*, 195-6)。そのためには長くて危険で費用のかかる旅が必要でした。それにもかかわらず祭祀にかかわる問題にとって神託がどれほど重要であったのかということを、このうえなく鮮やかに描き出しているのは、前352年のアテナイによる問いかけでしょう ((P.J. Rhodes/R. Osborne, *Greek Historical Inscriptions 404–323 B.C.*, no. 58.)。問いは、高名なエレウシスの女神たちを怒らせずに、エレウシスの聖なる土地の一面を耕作することができるかどうかでした。これは、政治的な含意をもつ問題です。というのは、この土地はメガラとの国境にあり、古来きわめて問題含みであったからです。また財政上の含みもありました。神が否といえど土地を使うことができなかったからです。2つの錫片が引かれました。一つには「アテ

ナイ民衆にとってバシレウスが境界の外の聖なる土地を（宗教的な構造物のための収入を得るために）貸し出すことは、望ましくかつ選ぶべきことか」、もう一つには同じ質問がネガティブなカタチで「これが為されないことが望ましいか」と書かれていました。錫片は両方とも封印され青銅の水差し（ヒュドリア）に入れられました。それから金と銀の水差しが運ばれます。青銅の水差しを振ると、二片の錫が落ちてきます。すると今度は、それぞれ金と銀の水差しに入れられます。これらは封印されます。デルフォイに使節が送られ、アテナイが、金銀どちらの水差しに入った錫片に従うべきかを、神に尋ねます。これらすべては、高い公開性と祝祭性のもとにおこなわれました。もちろん、その要は、いかなる人間の関与も決定から確実に排除するところにありました。単純な諾否の決定が、神による評決の偶然に任されたのです。

[これについては論じませんが、ヒュペレイデスによるエウクセニッポス弁護弁論で言及されるアンフィアラオス神へのト占についても留意しなくてはなりません。R. Parker, *Polytheism and Society at Athens*, 107 ページ。]

予言者（マンティス）

このようにアテナイ人は、祭祀をめぐることは、国家として決まり切った神託におおいに依存し続けていました。だが、すでに述べたようにアテナイには自分自身の領域内に神託所がありませんでした。個人にとって、デルフォイまで旅することは不便でもあり出費でもありました。ドドナの場合はもっとひどかったのです。旅をした人がいなかったわけではありません。クセノフォンはアナバシス〔大遠征 訳者補〕に加わるまえに、デルフォイで有名な質問をしています²⁾。でもごく普通のアテナイ人は、地域の予言者であるマンティス（単数形はマンティス）のもとを訪れたことでしょう。マイケル・フラワーによるマンティスについての優れた著作をお勧めしておきましょう（参考文献）。マンティスが用いる主たる技法は、犠牲獣の臓物から神意を図る方法でしたが、ときおり鳥の飛行を見ることもありました。犠牲によるト占についてのもっともよい情報源は、クセノフォンの『アナバシス』です。ここから、われわれは、神託うかがいとまさに同種の問題について、助言を求めることができたことを知ることができます。たとえばクセノフォンは、大遠征の単独の指揮権を与えられてどうしたらよいのかわからなかったのが、指揮権を受けることが彼にとって有利にはたらくかどうか、犠牲をおこなってゼウス・バシレオス神の助言を仰ぎ、2度目の犠牲によって回答を確認したように思われます（『アナバシス』第6章第1節22-24）。クセノフォンはいったん指揮者となったあとも犠牲を捧げ、ほかにも4・5回、決定的な決断にあたって、異なる神々にうかがいを立てています（第5章第6節16, 27-28; 第6章第2節15; 第7章第2節15-17; 第7章第6節44）。個々のアテナイ市民もまた、マンティスにたいして大量の神意うかがいをおこなっていたに違いありません。まさにドドナで神に尋ねられていたのと同じ

ような実的な問いが、マンティスにたいして示されていたに違いないのです。しかしわたくしどもは、ただ一例を除いてそれを知ることができません。高名な將軍ニキアスは鉾山を所有していましたが、鉾山経営についての助言を得るために、個人的に予言者を雇っていたのです（プルタルコス「ニキアス伝」第4章第20節）。

ご存知の通り、予言者は軍事面でも大きな役割を果たしていました。この問題は、ここで立ちいて論ずるにはあまりにも複雑すぎますが、ひとつだけ、遠征や戦闘の前にアテナイ人たちが予兆を占ったということを強調しておきましょう。トゥキュディデスが唯一、それを伝えています（第6巻第69章第2節）。トゥキュディデス自身も、將軍職にあったときには、予言者を連れていたに違いありません。偉大なる合理主義者であった歴史家が、予言者と会話を交わしているところを想像してみるの面白いです。予言者は、なかなかの野望を抱きうる立場にありました。予言者ランボンは、アテナイの政治生活でも著名な人物でした。彼はトゥリオイの植民地建設に関与し、前421年にはアテナイ側の一員としてニキアスの平和に署名し、デルフォイへの初穂をめぐる先述の決議にたいして民会で立ちあがり、修正動議を通すことに成功しています。彼はだれよりもアテナイで宗教的な権威に近い位置にあった人物でした。しかしマンティスは、つねに、金目当ての山師として攻撃される危険と背中合わせでした。悲劇のなかであってさえ、偉大な神話上の予言者テイレシアスにたいする攻撃をみとめることができます。オイディプスは怒って彼のことを「謀る魔術師。自分の利益しか考えず、自分の技術に目が眩んだずるがしこい乞食坊主」（ソフォクレス『オイディプス王』第387-9行）と呼んでいます。

神託謡い

トゥキュディデスは前413年のシケリアの災厄ののち、アテナイ人が「クレスモロゴイと予言者、そして神的なものに訴えて（θείάσαντες）アテナイ人がシケリアを手中にするであらうという希望を抱かせた、すべてのものたちにたいして怒りを抱いた」と伝えています。この文章はわたくしたちに、クレスモロゴイ、すなわち神託謡いのことを紹介してくれますが、クレスモロゴイがどこまでマンティスと違っていたのかははっきりしません。手法はたしかに違っていました。マンティスが主として犠牲を通じて判断したのにたいして、クレスモロゴイは書物を用いました。彼らは、バキスのような、いにしへの予言者が語ったとされる神託集を持っており、これらの古い予言が現在の出来事にも関係していると論じたのです。しかし両方の技を用いる人物もいたでしょう。アリストファネスは、『鳥』（第958-991行）で、クレスモロゴスをたいへん面白おかしく攻撃しています。彼はクレスモロゴスを、私利私欲だけを求める詐欺師として扱っています。しかしヒエロクレスは、クレスモロゴスとして成功した人物でしたが、[予言者]ランボンと同様に、たいへん著名人でありまし

た。前6世紀、すでに、ペイストラトスの宮廷にクレスモロゴイと思しき存在を確認することができます。トゥキュディデスの件の文章は、クレスモロゴイが政治的影響力を発揮できたことを示しています。もしアリストファネス（『騎士』第61行、第996-1097行）を信ずるならば、政治家クレオンは古い神託を民会で引き合いに出すことを常態としていました。トゥキュディデスの文章は、また、クレスモロゴイやマンテイスが、信用を失墜しえたことも示しています。しかしそれは一時のことで、彼らが常に不人気をかこっていたというわけではありませんでした。前394年のある碑文は、アテナイ人が、タソス島からやってきたシトリュスという名の予言者に、あきらかに軍事遠征の際の助言の成功を理由として、市民権を与えられていることを伝えています（Parker, *Polytheism*, 117）。

結論に入るときがきました。アテナイのト占には多くのかたちがありました。神託うかがいもあれば、クレスモロゴイもあれば、マンテイスもあったのです。人々はさまざまな文脈でト占に向きあいました。ト占は公共生活の一部を占めており、あらゆる軍事遠征にとって欠かせない要素でありました。それはまた、個々人にとっても、その生活のなかで選択をくだすために、たしかに重要なことだったのです。わたくしは、宗教上の問題については神託がうかがわれたが、政治上の問題については、おそらく、神託がうかがわれることはなかったと論じてきました。しかしそれはト占がいっさい政治上の影響力をもたなかったということではありません。トゥキュディデスが、シケリアでの災厄にたいする反応についてたいへん興味深いことを述べています。重要な決断が、すべからく予言者からの膨大な助言や、口承による数多くの古い神託を伴っていたことを示唆しているからです。ただ、その種の発言には、デルフォイに実際にうかがいを立てるという決断が持ちえたような権威が備わっていませんでした。われわれの知る限り、アテナイ人は、シケリア侵攻の決定に際して、デルフォイに公式にうかがいを立てることはありませんでした。トゥキュディデスはクレスモロゴイとマンテイスの影響力について述べていますが、民会が助言を求めることを決定したとは一言も述べていないのです。すなわち政治的な問題について、アテナイ人たちはマンテイスやクレスモロゴイの言葉に耳を傾けましたが、最終的な決断を神の評決に委ねることはなかったわけです。（もし私が現代との比較をすることができるとすれば、国家が政治について神託を求めることは、住民投票をするようなものです。神の声には、民衆の声と想定されるものと同様、従わなくてはなりません。でもアテナイ人はそうしなかった。彼らはなんと賢明だったことか。彼らは自分自身で最終的な決断することを選んだのでした。マンテイスとクレスモロゴイは、それと対照的に、専門家といわれる人々のようなものでした。）彼らは影響力を持っていましたが、それに従わなくてもよかったのです。わたくしどもが本当には知ることができないこともあります。それは、アテナイで私生活の導きのために神慮をうかがっている個人の存在です。しかし彼らはきっと、個人的なことがらについてマンテイスに、しばしば尋ねごとをしていたことでしょう。ただ、それを詳細に示す証拠がないだけなのです。ここで遠征中のクセノフォンのことを思い出してください。彼は、重要な決断

を下すときにはつねに、犠牲によるト占をおこなっていました。最後の論点に移りましょう。アテナイの文学作品には、予言者が攻撃されるものがたいへんたくさんあります。これが、アテナイ人が合理主義者になったことを意味するなどと考えるはいけません。エヴァンス＝ブリチャードとアザンデ人にわたくしは立ち戻ってきました。思い出してください。アザンデ人はみな、ほとんどの神職は信頼ならないと考えていましたが、ト占については強く信じていたのです。わたくしは、ほとんどのアテナイ人の態度もほぼ同じようなものだったと考えています。予言者を攻撃する社会は、予言者に助言を求める社会にはかならないのです。

脚注

- 1) R. Merkelbach and J. Stauber, *Steinepigramme aus dem griechischen Osten*, (Munich, 1998-2002), (02/12/01), (03/02/01), (04/01/01), (06/02/01), J. Krauss, *Die Inschriften von Sestos*, 11; cf. F. Graf, 'An Oracle against Pestilence from a Western Anatolian Town', *ZPE* 92, 1992, 267-79.
- 2) 第3章第1節5-8. クセノフォンは行き、アポロンに、どの神に犠牲を捧げ祈ることで、彼が心に定めている旅を最善にもっとも相応しく為しとげ、成功して安全に帰国できるかを尋ねた。アポロンは彼に、どの神に犠牲をおこなうべきかを告げた。

参考文献

全般的な内容について

- S. Dakaris, J. Vokotopoulou, A.P. Christidis, *Ta Χρηστήρια Ἑλάσματα της Δωδώνης των ἀνασκαφών Δ. Εὐαγγελίδη*, 2 volumes (Athens, 2013) [DVC].
- E. Eidinow, *Oracles, Curses and Risk among the Ancient Greeks* (2007).
- M. Flower, *The Seer in Ancient Greece* (2008).
- T. Harrison, *Divinity and History. The Religion of Herodotos*, 2000 (第5章 'Oracles and Divination')
- S.I. Johnston, *Ancient Greek Divination* (2008).
- E. Lhôte, *Les lamelles oraculaires de Dodone* (Geneva, 2006).
- S. Price, 'Delphi and Divination', in P. Easterling and J. Muir eds., *Greek Religion and Society*, 1985, 128-54
- R. Parker, 'Greek States and Greek Oracles', in R. Buxton ed., *Oxford Readings in Greek Religion*, 2000, 76-108.
- R. Parker, 'Seeking the Advice of Zeus at Dodona', *Greece and Rome* 63 (2016), 69-90.
- R. Stoneman, *The Ancient Oracles* (2011).

世界を変えた人類学の古典として

- E.E. Evans-Pritchard, *Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande* (1937, abridged 1976). [E.E. エヴァンズ＝ブリチャード『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術』向井元子訳、みすず書房、2001年(原著1937年)]

アテナイにおけるト占について

- R. Parker, *Polytheism and Society at Athens*, 2005, 105-120.
- H. Bowden, *Classical Athens and the Delphic Oracle*, 2005.